

白藍塾オリジナル

2024年度 入試小論文分析&解答のヒント

2024年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 慶応・経済学部

例年通り、課題文を読んで2つの設問に答える問題。今年度は、「説明問題（200字）＋複雑な条件のついた論述問題（400字）」の2本立てになっているが、十分予想の範囲内だろう。

課題文は、哲学・文学（人文科学）と自然科学との古典に対する態度の違いを述べた文章。「自然科学では、研究によって一度明らかにされた事柄は確立された事実とみなされ、それを前提としてさらに研究が進められるので、それ以前の研究を古典として振り返る必要性はない。一方、哲学や文学の古典は、作者の個性やその時代の文化と密接に関係していて、時代が変わっても意味を失わないため、つねに振り返る必要がある」といった内容だ。エッセイ調で読みやすく、固有名詞さえ気にしなければわかりにくいところはないだろう。ただし、筆者は哲学・文学に関しては、研究者（哲学者や文学者）の問題と創作者（劇作家など）の問題とをごちゃ混ぜに語っている部分があるので、その点は注意が必要だ。

設問Aでは、「哲学・文学にも歴史的発展はあるが、自然科学と同じ意味での進歩はない」という箇所について、理由の説明が求められている。

自然科学では、古い知識は新しい知識に取って代わられ、つねに更新され続ける。それに対し、哲学・文学では、古典に基づいて新しい作品が生まれることはあっても、そのために古典が意味を失うことはない。そうした違いを、字数に合わせて説明すればよい。課題文が理解できていれば、難しい点はないはずだ。

設問Bは、少しややこしい。まず、①下線（ア）についての説明をした上で、②社会学者としてどのような問いをどのように立て、③どのように検証していくか……を具体例に即して論じることが求められている。書き方としては、この①～③をそれぞれ1つの段落にまとめてつなげるつもりでよい。

下線（ア）の説明は、意外に難しい。まず、社会学者が専門雑誌を読むのは、自然科学者と同様、同時代の研究成果を知り、それを踏まえて研究を進める必要があるからだろう。

一方、古典については、社会科学と自然科学の違いを踏まえて考える必要がある。普遍的な自然を相手にする自然科学と違って、社会科学はつねに変化する社会現象を扱っている。そのため、それを分析するための足場として何らかの概念や方法論を必要とする。その手がかりを古典から学び

取ろうとするわけだ。そうしたことを説明すればよい。

次に、「どんな問いを立て、どう検証するか」という部分だが、これも下線（ア）の内容を踏まえて考える必要がある。問いの具体例は、社会科学的なものになっていれば、自分の考えやすいものでかまわない。重要なのは検証のプロセスの説明なので、「その問いについて古典から分析のための概念や方法論を学び、それを使って分析した上で、同時代の論文の研究成果やデータなどと比較検証する」といったことがきちんと書けていれば、それで十分だろう。

経済学ももちろん社会科学の一分野なので、そうした社会科学の考え方や対象への態度などが理解できているかどうかを試されている。そうした出題者のねらいをしっかりと押さえて、答えを考える必要があるだろう。

* 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室（03-3369-1179） <https://hakuranjuku.co.jp>